

25 April 2012

Dear Prof. Gerhard Banik,

I am enclosing a copy of my book review in "*Bunkazai Hozon-Syufuku Gakkai Tushin* (Newsletter of The Japan Society for the Conservation of Cultural Property)"

We did not remind the all found errors in "Paper and Water", but attach a copy of some errors.

Dr. Ute of BOKU University gave us a copy of the beautiful and informative brochure, when she came to our university. We did miss your article, probably it is in the photo section.

I am very grateful to you for your kind offer, which you will send me a copy of the revised edition of "Paper and Water".

Sincerely yours,



Masamitsu INABA

Professor

Conservation Science Laboratory

Graduate School of Conservation

Tokyo University of the Arts

TEL: +81-50-5525-2285, FAX: +81-3-5685-7780

masa.inaba@nifty.com

(2011年 12 月 22 日発行)

# 文化財保存修復学会 通信 No.140

## 文化財保存修復学会

〒110-0008 東京都台東区池之端 4-14-8  
ビューハイツ池之端102号室  
NPO法人文化財保存支援機構 気付  
TEL: 03-6661-2982 FAX: 03-6661-2983  
E-mail: jsccp@sepia.ocn.ne.jp

The Japan Society  
for  
the Conservation of Cultural Property

c/o Specified Nonprofit Organization  
Japan Conservation Project  
4-14-8-102, Ikenohata, Taito-ku, Tokyo 110-0008, Japan

## 文化財レスキュー活動に参加して

愛知県陶磁資料館  
田村 哲

去る3月11日の午後、未曾有の規模となる東日本大震災が発生し、これにより被災した文化財等を救援する目的で発足された「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」の活動隊として「文化財レスキュー」が行われた。

陸前高田市は岩手県沿岸南部に位置し、陸中海岸国立公園随一の名勝「高田松原」などの豊かな自然景観の残る風光明媚な場所であった。さらに、東北地方では第1号の公立登録博物館である陸前高田市立博物館が所在し、国登録有形民俗文化財「陸前高田の漁撈用具」や国指定史跡中沢浜貝塚をはじめとする三陸沿岸貝塚群から出土した骨角器、陸前高田市出身の博物学者「鳥羽源蔵」による昆虫標本、植物標本、さらには絵画等のコレクションを所蔵していた。さらに、同市海と貝のミュージアム、市立図書館などの資料管理施設が所在した。これらの施設を含む町全体が、地震あとの大津波で壊滅的な被害を受けたことは、皆さんもご周知の通りであるが、特に、市立博物館においてはスタッフ全員をも失うという、想像を絶する事態に至ったのである。

この甚大な被害に遭われた中で、幸い無事だった海と貝のミュージアム主任学芸員（兼陸前高田

市立博物館主任学芸員）の熊谷賢氏であり、開館当初からの関わりを持つ本多文人氏は、緊急時対応のなかで、現場に復帰された。そして、このお2人を中心に、博物館収蔵資料の救援、整理が現場で進められている。現在、11月末時点において、民俗資料については、被災したままの状態、いわゆる汚れた海水や泥等を被ったままの「不安定な状態」から一時保管のできるものとしての「安定した状態」にするための「初期的な保存作業」に一段落がついたと伺っている。

なお、筆者がこのレスキュー活動への参加した経緯として、勤務館での保存担当の従事から出た課題への復習があった。勤務館においては通常、免震展示や虫菌害対策をはじめとした予防的保存活動を行っているが、この度の様な甚大な規模となる地震等は全く想定しておらず、その一方で、筆者の勤務地である名古屋周辺も東南海沖地震に直面している現状も抱えている。館としての予備保存活動および発生後の被害対策としてのマニュアル立案と策定について、見直しはじめた時の出来事でもあった。

勿論、筆者においてもこの度の被災からの復興に向けた何らかの救援ができればと考える立場の一人であったが、これだけではなく、この様な事態の中でのこされた資料が今後どのように保存され後世に伝えられるかについてじっくりと学ぶ事のできる大切な機会であった。

今回は、被災された市街地にある博物館の所在地から保管場所に救出（4～6月期）された次の処置であり、中でも、手つかずの民俗資料に対する

本研究は5年の計画で、最終年に和紙と洋紙に関する基本用語集発行を目指しています。この用語集は、紙の購入時・使用時・また文化財に使われている紙を理解する上で参照できる基礎資料とする予定で、最初の2年は手漉き紙、次の2年は機械漉き紙に焦点を当て、フランスと日本の両国で交互に研究会を設け、双方の製造者・研究者・使用者が同時に同じものを実際に見て、各人の視点で理解した事をすり合わせ、語彙の選択、他国の読者に伝わる表現の検討を進めます。各方向から互いに補完する意見が出されることは、用語集の完成度、実用性に大きな意義があると考えています。

今年2011年の参加者は、日本側は、川村朋子(山領絵画修復工房、紙本修復家)をオーガナイザーに、和紙製造者には内藤恒雄(柚野手漉き和紙工房)、増田の3名のチーム。フランス側はV. デュバル氏(ルーヴル美術館、紙本修復家)のオーガナイズで、産業革命以前の製紙法を研究・再現しているムーラン・デュ・ヴェルジェ工場のJ. プレジュー氏をはじめ紙史研究者、製紙技術大学教授、修復家、歴史製本の専門家の6名のチームでした。9月にフランスで行った第1回会合のプログラムは次の通り。

- 12日：パリのフランス人文科学研究所にてプロジェクト発足と口頭発表会。日本からは重要無形文化財指定の考え方(増田)と、手漉き和紙特有の打解の工程(内藤)について発表。フランスからは国際基準としての紙分類法、西洋の修復での和紙導入、産業革命以前の手漉き紙製紙法、透かし模様についての発表
- 13日：アングレームの紙博物館訪問。その後館内で、フランス手漉き紙産業と和紙産業の現状について、両国より口頭発表(12、13日は申し込み制公開)
- 14、15日：ムーラン・デュ・ヴェルジェ紙漉き場にて見学および討論会。また紙史研究者より産業革命以前のゼラチン・サイジング法の再現についての解説
- 16日：ルーヴル美術館にて紙作品例の特別閲覧、紙本修復室訪問
- ムーラン・デュ・ヴェルジェ工房で行われている古い文献の研究にもとづく、産業革命以前の手漉き紙の再現は、現在世界で唯一の設備と技術で行われ、特筆に価します。今後詳細な報告を行う予

定です。また全行程はビデオでも記録しており、いずれ公開も視野に入れ活用法を検討中です。来年度は同様のプログラムで和紙に置き換え、日本での実施を計画しています。また本事業は国際交流基金、Fondation Maison des Sciences de l'Homme、ルーヴル美術館、Fondation de Franceの

## 書評

### 「紙修復家の疑問に答えます」

稲葉政満

Gerhard Banik & Irene Brückle 編・著  
Paper and Water : A Guide for Conservators  
Butterworth-Heinemann 2011/4/14 発売  
544 ページ 25 x 19.6 x 3.4 cm

紙を水処理することは現場で多用されているが、どうしてこのような処理を行うのか、あるいは、してはならないかを知りたいと思っても、どこから勉強して良いか迷った方も多いと思われる。紙の水処理を化学的に理解するには水素結合から始まり、水、セルロース、そしてセルロースの集合体としての繊維、繊維の集合体である紙それぞれの構造の理解が欠かせない。教える側にたっても、有機化学の入門書はあるが、紙の物性に関する教科書はあるものの、情報が分散して書かれている問題点があった。2006年に出版された山内龍男の「紙とパルプの科学」(京都大学出版会)(191ページ)はコンパクトに良くまとめられているが、紙の水洗に関わるような記述はほとんど無い。

これは、欧米でも似たような状況があったようで、一念発起して紙の保存科学者らによってまとめられたのが本書である。4年前くらいから出版予定であったのがようやく今年出版された。

本書の構成は

- 1から3章 水の性質に関する化学的な説明
- 4から7章 紙の構造等の物理的性質、水との相互作用
- 8章 紙の劣化と水
- 9から14章 紙の水洗、水性脱酸性処理、乾燥の科学
- 補遺 基礎的データ、成分の簡易分析法など

付録 DVD 理解を助ける動画を収録  
となっている。

本書の特徴は、ビジュアルな解説の図があり、文系の方でもイメージをつかめるように工夫されており、この本さえ読めば、紙本修復家が必要な化学的知識が基礎から学べ、そして具体的な紙と水の相互作用の科学を学べ、水を使った修復作業中に紙に何が起きているかのイメージがわくことである。具体的な修復方法が書かれているわけではないが、実際の紙の修復処置を理解し、さらに発展させることを可能にするであろう。内容は大変興味深いもので、読者はこの本に引き込まれていくであろう。同書によると4日間のセミナーの分量ということになっているが、大部でなかなか全部を通読するのは大変であるのも事実であるが、7章以降は必要に応じて拾い読みでも十分価値がある。今後数十年にわたってこの分野のバイブルとして君臨する名著であり、紙の修復家が座右におくべき本として推薦する。

---

## 公開シンポジウム

---

文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表一般社団法人 文化財保存修復学会 公開シンポジウム (B)」  
文化財をまもる—災害から文化財をまもる—大規模自然災害における文化財レスキュー—阪神・淡路から東日本大震災

12月3日(土)、大阪万博記念公園内の国立民族学博物館にて、下記のとおりシンポジウムを開催した。基調講演2本、活動報告4件、パネルディスカッションにより、阪神・淡路から東日本大震災まで、学会が行ってきた活動を総括すると共に、特に今回の東日本大震災では、日頃重ねてきた悉皆調査の成果を基に迅速な対応をしたNPO法人「宮城歴史資料保全ネットワーク」の活動に大いに学んだ。110人以上の熱心な参加者を得て3部にわたるシンポジウムを無事終えることができた。詳細報告は次号通信に譲るが、講演内容は『文化財の保存と修復』シリーズ第14冊目として来年度刊行される予定である。

### 講演

阪神・淡路大震災から東日本大震災—学会としての取り組み— 三輪嘉六

3.11大震災と宮城資料ネットの歴史資料レスキュー—活動から見えてきたこと—

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局長 佐藤大介 (東北大学)

### 活動報告

阪神・淡路大震災における活動の課題

内田俊秀

中越地震における活動の課題—救援の要請と被災資料の修理—

本田光子

能登半島地震における文化財復興支援活動—被災資料の調査・修復から復興へ—

中村晋也

東日本大震災における文化財レスキューについて—民俗資料を中心に—

日高真吾

### パネルディスカッション

「文化財レスキュー —16年の歩みと今後—」

コーディネーター 森田稔

パネリスト 三輪嘉六・佐藤大介・内田俊秀・本田光子・中村晋也・日高真吾・村上隆

---

## 第6回読売あをによし賞募集開始

---

本学会が特別協力として参加している、第6回『読売あをによし賞』の募集が始まりました。詳しくは本号通信に同封されている“ちらし”をご覧ください。募集の締め切りは平成24年2月29日(水)です。

---

## 第34回大会の開催について

---

来年度の大会・総会の日程が、下記のとおり決まりましたのでお知らせします。

期 日: 2012年6月30日(土)、7月1日(日)

会 場: 日本大学文理学部(東京都世田谷区)

ファーストサーキュラー 12月26日

研究発表のエントリー締切 2月13日(月)

セカンドサーキュラー 4月中旬(予定)

研究発表を予定されている会員の方へ